

国際文化研究会

背景

グローバル化の名のもとに国や地域を超えた人間の移動が激化した社会状況の中、人は新たな「文化」を生みだしつつ、同時に個々人が生まれ育った国や社会に根付いた「文化」も持ち合わせた状況にある。これまで以上に「文化」の成り立ちやその様相が複雑になる中で、我々が対象とする「文化」とはどこで生じ、どのようなものであったか、現在どのようなものであるか、そして、今後どのようにあるべきか？

メンバー・研究内容

文研・英米／松本小夜子 中世イギリス文学

文研・英語圏／中谷可惟 ジャズ批評

文研・英語圏／猪熊慶祐 (代表) アメリカ文化・文学

国関／五十嵐美華(副代表)国際関係 (AU・人権)

目的

「文化」とは何か我々が携わる文化に関わる学問が現代社会、そして未来の社会に貢献するためには、「文化」をより多角的な視点から捉え分析する。

運営方法

場所：主に究論館

頻度：月に1、2回

形態：読書会

* 各自の専門分野について初修者にも分かり易く20分で報告 質疑応答と議論

* 専門分野の異なるメンバー間に共通する議題の発見を促す目的、本学教授1名に講義を依頼

* あらかじめ設定した共通課題についての討議や読書会

開催内容

輪読会

グスタフ・ルネホッケ著
『迷宮としての世界—マニエリスム美術』

ヘンリー・ルイス・ゲイツJr.著
『シグニファイング・モンキー—もの騙る猿／アフロ・アメリカン文学批評』

西村清和著
『イメージの修辞学：ことばと形象の交叉』

成果・課題

* 各自の研究に共通する書籍を読み議論を交わすことで、各々の研究に役立てることができた。

* 全く異なる研究分野が議論がなされることが少なく、より刺激ある議論展開がされる機会が少なかった。